

介護の

現在



3

「いつになれば入所できるのか、見通しが立たない。毎日不安です」。富士市の女性(70)はそう話して涙を浮かべた。

女性の夫(73)は2009年12月、脳こうそくで倒れて入院した。入院費用は月額15万円。蓄えはあつという間になくなった。退院後、県内の複数の特別養護老人ホーム(特養)に入所を申し込んだが、どこも空きはなし。2人の年金は月額計約13万円で、特養以外の施設に入る余裕はない。夫は今、ショートステイ(短期入所)事業所に宿泊して特養の空気を待っている。

だが、夫はリハビリで少し歩けるようになったことなどから、要介護度は現在の4から3に下がる可能性が高い。その場合、特養への入所はさらに難しくなる。女性は耳が不自由なうえ腰が悪く、歩くのも精いっぱい。身長が30センチ近く高い夫の世話はとても無理

「特養」に希望者が殺到

「小規模多機能型」に期待

だ。子供はおらず、唯一頼れる身内の義理の姉(68)も持病のため、つきっきりで夫の面倒をみてもらうことはできない。女性の不安は募るばかりだ。

「突然用事ができた時や



字の書き取りに取り組む人たち。小規模な施設だから職員の数も行き届く(4月26日、富士市の「2人3脚」で)

疲れた時にも、母をすぐ受け入れてくれて助かった」。母親(78)が重度の認知症という富士市の女性(49)は、介護保険制度の導入により新たに始まった「小規模多機能型居宅介護」サービスを行っている施設「2人3

脚」(富士市境)の利用者だ。

「2人3脚」に登録すると、施設での通所介護や宿泊、訪問介護のサービスを希望に応じて利用できる。

サービスの利用回数に制限はなく、利用料も食費や宿泊費などを除き月額定額制。緊急時には職員が24時間365日、自宅に駆け付ける。施設介護と同じサービスを在宅でも受けられる。

女性も母親の症状に合わせ、最も多い時で月15日宿泊した。かかった費用は多い月で約12万円。今は母親は併設のグループホームに入り在宅介護の必要はなくなったが、「『2人3脚』がなければ、疲れ果てて家族で共倒れになっていただろう」と女性は振り返る。

在宅介護が難しい高齢者を比較的低料金で受け入れる特養は、入所希望者が殺到している。県長寿政策局によると、在宅介護で半年以内の入所を希望する人

は09年1月時点で4900人。うち、「一人暮らしで要介護度が高い」など、入所の必要性が高いとされる人は1437人に上る。県はこの10年で特養の定員数を約2倍に増やしたが、施設整備が高齢化の進行に追いつかず、入所まで数年待ちも珍しくない。

そんな中、特養よりも設置しやすく柔軟な使い方ができる小規模多機能型施設への期待が高まっている。実際、「2人3脚」でも、週1回夕方に帰宅して翌朝施設に戻る「週6泊」の利用者が5人いる。約6割の施設が採算割れしているという課題もあるが、「在宅介護と施設介護をつなぐ施設。将来性は豊か」(宮城島好史・県長寿政策局長)として、県は今年度33施設を新設する予定だ。

介護といっても、心身や資産の状態など、人により置かれた状況は異なる。施設介護を選ぶ場合、様々な条件に対応できる各種の施設が用意されていることが必要だ。介護保険制度はそうした多様な選択肢を提供する基盤になり得ているのだろうか。